LF

直前講習

解答

Ｚ会東大進学教室

直前一橋大国語総合演習

【2 回目】

【問題】

【二】 出典…田岡嶺雲『下流の細民と文士』 ／ オリジナル問題

文章略解

文明開化に伴う器械の精巧化と奢侈の風潮は、貧富の隔絶を甚だしく拡大した。そのため、上流社会の者たちが贅沢三昧に堕落する一方、下流社会の者たちは餓死を避けるために窃盗などの罪を犯さざるをえなくなった。最も悲惨で憫むべきはこの社会的弱者たちである。そして世間が社会問題に目を向け始めている今、世の作家たちこそ、真っ先に正義を重視し弱者に共感し、非力な彼らに代わってその窮状を訴えるべく筆を振るうべきである。

解答

問1 裕福な者が、飽食しているにもかかわらず、贅沢な浪費生活を送る時間がまだ足りないと不平を言うこと。〔48字・解答例〕

問2 貧窮者が生きるためにやむなく犯す罪に厳しく、富裕者の奢侈による悪徳を見逃すのは、不条理だということ。〔50字・解答例〕

問3 世の人々はもはや才能ある男と美しい女の恋愛を描く細末な小説にうんざりしている。

問4 世の中に対して自分の思いを訴える手段も力もない人々

問5 社会的弱者救済の主張に説得力を持たせるには正義を重視し弱者に共感する必要があると筆者は考えるから。〔49字・解答例〕

解説

問1 傍線部は対句的表現の前半に設定されている。問題文中の対句は、常に前半が「富者」に、後半が「貧者」に関する表現となっ

ている。この文中の他の部分に見られる対句的表現に較べれば前後の対応がやや緩いが、やはりここも対句的表現の一部だから、筆者の言いたいことを読み取るには、同じセットの後半との対応関係を必ず利用する。

まず、傍線部の「肉食の者腹常に便々」は、ひとつ前の対句的表現の後半にある「菜色の丐徒（不健康な顔色をした物乞い）」からの連想で「肉食」が出てきたと同時に、傍線部の後にある対句後半の「陋屋の裡、眼凹み頬落ちたるの人」すなわち「掘っ立て小屋で痩せこける生活を送る人」とセットになっている。したがって「便々」には「腹が出ている様子」を読み取ることができ、「（肉という贅沢な）食べ物が十分にある」ことを意味すると考えられる。

次に、傍線部の「冬日の短きを消遣の途なきに苦しみ」は、後半の「秋夜の長きをなほ作業の捗々しからざるにかこつ」と対応する。後半は「秋の夜は長いのに、夜になっても仕事をしなければならず、そのうえその仕事がはかどらないことに愚痴をこぼす」ということだから、その反対を考える。「消遣」は本来は「追い払うこと・憂さ晴らし」の意味だが、ここでは後半との対応を考えて「消費」＋「手放す」の方向で解釈すればよい。「途」の訓読みには「みち」があり、また大和言葉の「みち」には「方法・手段」の意味がある（「使いみち」など）。これで「冬日の短きを消遣の途なき」は「冬の日が短いから（手許にある物を）消費したり手放したりする暇がない」程度に解釈できる。さらに、前半の「便々」には先ほど見た「太鼓腹」以外に「時を無駄に過ごす様子」という意味もあることを思い出そう（あるいは憶えておこう）。そうすると、「消遣」は文脈上「浪費」の意味を含むことが見えてくる。

問題は、傍線部最後の「苦しみ」の解釈である。続く表現の対応する部分に「かこつ」があり、辞書的な意味では「苦しみ」と反対にならない。ここで「苦しみ」を言葉の表面的な意味だけで読むと、「金持ちには金持ちの辛さがあるものだ」という意図になってしまう。しかし問題文中に筆者が「富者」を擁護する表現は見られず、ここだけを「富者に対する擁護」と解釈することには無理がある。ここは「旨いものをたっぷり食っているくせにまだ浪費し足りないなどとホザきやがるとは、まったくもっていい気なものだ」という皮肉を込めた表現だと判断すべきである。

なお、答案をまとめるにあたって、「冬日」を機械的に「冬の日」あるいは「冬の昼間」などとするのはまずい。「貧者」が生活に苦しむのが秋だけでないことが明らかなように、「富者」が贅沢するのが冬だけでないことも明らかだ。ここは「もっと贅沢したい＝時間が足りない」の意味と「仕事が終わらない＝時間がいつまでもかかる」の意味とで「冬日＝短い」・「秋夜＝長い」という文学的な約束ごとを用いた言葉の綾に過ぎない。傍線部に「対句」の発想が生きていることを意識して、答案では「時間の不足」

の意味を打ち出すことが必要だ。

問2　傍線部直前に感動詞「嗚呼」があり、傍線部末尾に詠嘆の終尾辞「乎」がある。さらに、主語が「人」で、述語に対して助動詞相当の「能はず」を付加していることにも注目すると、傍線部はそれ以前に述べてきたことに対する筆者の慨嘆であることがわかる。そこで傍線部以前の構造を確認すると、1行目の「十九世紀のいはゆる文明開化なるものは」とほぼ同義の表現が、6行目にもう一度「今の文明は」の形で出ていることが見える。このことから傍線部以前を二つに分けると、6行目前半までは「富者の奢侈・貧者の困窮」を対比するだけだが、「今の文明は」以降には「悪徳・罪」といった語が多用される点でそれ以前と区別できる。したがって、傍線部はとくに6行目の「今の文明は」以降を承けると考えるのが妥当だ。

そこで「今の文明は」以降を読むと、「下層社会では餓死するか盗んで食べるかしか選べない。盗んで食べることはもちろん罪だが、人間は必ずしも『伯夷の潔』を貫くことができない。正義のために餓死するよりは、罪を負ってでも生きないわけには行かない。このような下層社会の罪は、安逸のあまり犯す上流社会の悪徳に較べれば、その実情に憐憫を施すべきなのに、人は罰して許さず、かつ一方では上流社会の『呑舟の魚』を見逃してとがめない」と言っている。「伯夷」は「伯夷・叔斉」兄弟の兄で、中国殷末周初の人。周の武王が殷の紂王を討とうとするのを兄弟で諫めたが聞き入れられなかったので、放伐後は周の俸禄を拒んで（首陽山というところに）隠れ、ついには餓死したという伝説の人である。つまり「餓死するまでに自分の信念と正義を貫いた」ということだ。漢文ではお馴染みの人物だろう。「呑舟の魚」は『荘子』・『列氏』や『史記』などに見られる語で、「舟を丸呑みにするほどの大魚」から転じて「（善悪ともに）大物・大人物」の意味に用いる言葉だ。ここでは批判の対象だからもちろん悪玉のことを言う。以上から考えて、傍線部の「明」は「容易に気付かれ、簡単に扱われること」＝「盗みて食ふこと」＝「貧者の罪悪」を指し、「暗」は「なかなか気付かれにくいこと」＝「上流社会の安逸の余勢の汚職・風俗紊乱」＝「富者の悪徳」を指していることがわかる。

さて、この問いの解説冒頭で確認したとおり、傍線部は筆者の「慨嘆」である。設問に「筆者は何が言いたいのか」とあるから、傍線部の内容を上記の要素で言い換えるだけでは出題意図を満たさない。8～9行目の「正を守りて餓死せんよりは罪名を受けて生きざる能はず。下流社会の罪悪これを安逸の余に出づる上流の悪徳に比すればその情や憫むべし」から、筆者が貧者に同情的なのは明らかだ。「富者の中には安逸の余勢を駆って悪徳に走るほどの享楽的生活を送る者までいるというのに、貧者の中には敢え

て罪悪を犯さなければ死ぬしかない絶望的な人さえいるのだ」というわけだ。したがって傍線部は貧者に対する筆者の憐憫をもとにした慨嘆だということになるから、「これではおかしいじゃないか」という怒りを含んだ嘆きを込めて表現していることを読み取って、これを答案の末尾に組み込まなければならない。「理屈に合わない」と考えれば「不合理」でも遠くはないが、傍線部は論理的というよりは心情的な表現だから、「筋が通らない」ことを示す「不条理」のほうがよい。「道理に合わない」という表現も許容解とする。

問3　これも傍線部が対句的表現の前半に設定されている。

「世」はもちろん「世間一般」のこと。念のために言っておくと、訓読調の文体では主語に「余」があることも多く、これは《謙譲の自称》として使われた。音読すると同じになるので、答案内容をあれこれ考えているうちに頭の中で「すりかえ」が起こる恐れがある。筆者の個人的な不満と勘違いしないように気をつけよう。（さらに念のために言っておくが、前問で扱った9行目に見える「余」は「～するあまり・～の勢い余って」の意味であって人称代名詞ではない。）

「才子佳人相思の」は、形の上では続く表現の「俠客烈婦の」に対応しているようにも見えるが、「才子（頭の良い人）」と「俠客（男気を貫く男だて）」が男性で、「佳人（美しい人）」と「烈婦（信義を貫く男勝り）」が女性であることに鑑みると、「相思」が余り物になっている。そこで「纖巧なる」と「講談めきたる」との対応を考えると、「講談」が基本的に「勧善懲悪」的なのに対して「纖巧なる」に「デリケートなありさま」という特質を見ることができるから、「相思」は「恋愛」の意味に解釈することになる。「相思相愛」という熟語をヒントにしてもよい。なお、当時の日本の「才子」は、「エリート」であることは多くても、必ずしも「美男」とは限らない。安直に「美男美女の恋愛」などとしてしまうと減点されるだろう。

「飽けり」は四段活用動詞「飽く」に《存続》の助動詞「り」が接続している。文末を「～ている」とすべきことは言うまでもないが、設問が「訳せ」というのだから、「飽く」も単純に（現代語の）上一段活用にするのではなく、同義語に言い換えよう。

最後に、「纖巧」に注意。「纖細・巧緻」といった意味であることは漢字から推定できるだろうが、それに「飽き飽きしている」のだから、この文脈では「こまやか」というよりむしろ「ちまちま」の方向性で解釈すべきだ。

問4　ここまでの文脈だけでも「民」が「下流社会の民衆」であることは明白だ。問題は「不告」だが、傍線部の後に「彼らに代はり

て……天下に愬ふる」ことを提唱していることに注目する。この提唱は傍線部の前の「作家たるもの」すなわち「作品発表の機会がある人たち」に向けてのものだから、「不告」は「（作家と違って）天下に何かを訴えることがない」の意味になり、しかもその境遇を「憫むべき」とも言っているから、「意図的に訴えない」のではなく「訴える手段や能力がない」と解釈する必要がある。

ちなみに、法律関係の用語に「不告不理の原則」という言葉がある。「刑事訴訟では検察が公訴しないかぎり、また民事・行政訴訟では当事者が訴えを起こさないかぎり、裁判所は勝手に審判すべきではない」という考えかたを言うが、ここでも「告」を「訴える」の意味で使っている。法・経などを含む社会科学系統の学部を志望する受験生なら弁えておくとよい。

問5　前問で扱った部分で、筆者は「作家は『不告の民』に代わってその窮乏を世に訴えよ」と主張し、その先例としてヴィクトル・ユーゴーを挙げて高く評価する。そしてその作品の邦訳が増えつつあることから、「日本でも社会問題に目を向ける人が増えてきたと考えられる」という。（22行目の「一葉（いちよう）の落つるを以て天下の秋を卜（ぼく）し得（う）べくんば」は、『淮南子（えなんじ）』の「見二一葉落一、而知二歳之将レ暮一」＝「一葉の落つるを見て、而して歳の将に暮れんとするを知る」に典拠があり、「わずかな現象から大勢を予知する」ことの喩えである。樋口一葉とは関係ない。）

ただし続いて23行目から「然れども」と警鐘を鳴らしてもいる。これが設問に答える要素に繋がってくる。23行目からの「先づ自ら動きて……始めて得べし」は、簡単に言えば「人を動かすにはまず自分が動けということがあるから、今の貧者の窮乏を代弁するなら、代弁者には第一に『不告の民』に対する深い共感が必要だ」ということだ。「万斛」は見慣れない言葉だろうが、「涙・血」の修飾語で「万」を含むことから「たっぷり」の意味だということはわかるはずだ（「斛」は容量の単位の一つで「石」に等しく、一斛（一石）は約１８０リットル相当だが、憶える必要はない）。続いて、右のようないわば「正義感の強い熱血漢」と対比的に、筆者は「軽薄なる幇間者流の作家、浅膚なる才子肌の文士」つまり「御機嫌取りや悧巧者きどりの文筆業者」を採り上げる（「浅膚」は「軽薄」とほぼ同義で「浅はかな様子」を言う）。とすれば「その純潔」は、直前の「軽薄なる幇間者流の作家、浅膚なる才子肌の文士」ではなく「熱血漢」、文中の表現で言う「今の貧窶者に代はりて天下に愬へんとするもの」の「純粋で高邁な精神」を指すことになる。

ここまでくればあとはもう一歩。「軽薄なる～」の直前の「始めて得べし」に「べし」という《当然》すなわち主観的判断に関わる助動詞が用いられていることに注意して、23行目からの「先づ自ら動きて……始めて得べし」の部分を「筆者の考え」として

まとめればよい。その際に、「貧窶者」は現代語ではほとんど使われない表現だから書き改めるが、問題文後半では筆者が「社会問題」という言葉を繰り返し用いているのだから、単に「貧者・貧乏人」などとするより、「社会的弱者」などとするほうがよい。また、「今の貧窶者に代はりて天下に愬へんとする」には代弁の具体的な内容すなわち「貧窶者の困窮を」が省略されている。これも勘案すれば「社会的弱者の困窮を代弁する」ことになるが、「天下に愬へんとする」の表現には代弁者の主体性が強くこもることに鑑みれば、「代弁する」では第三者的で少々無責任な印象が拭いきれない。そこでさらに「救済を主張する」といった形に改めて主体性も表現することが望ましい。

なお、24行目の「～とせば」を右の大意部分では「～ということがあるから」と意訳した。「せば」は、形の上では《順接仮定条件》となっている。しかし、評論文で筆者が（客観的事実でなく）自分の意見を根拠として何かを主張するときには、押しつけがましさを嫌って「私の意見を認めてもらえるなら」といったニュアンスを込めつつ仮定表現を用いながら、実質的にはそこに「私はこう考えるから」と《順接確定条件》の働きを持たせることが多く、24行目の表現もそれに該当する。現代のポストモダン評論でも多用される表現手法として意識しておこう。

【配点の目安】 65点　**問1** 13点　**問2** 17点　**問3** 9点　**問4** 6点　**問5** 20点

問1

〈ア裕福な者が、イ飽食しているにもかかわらず、ウ贅沢な浪費生活を送る時間がまだ足りないと エ不平を言うこと。〉…13点

※ア2点、イ3点、ウ5点、エ3点

＊アは、「肉食の者」を〈裕福な者〉の意で説明したものが可

＊イは、「腹常に便々」をアが常に飽食の状態にあるという意味で説明したものが可

＊ウは、「冬日の短きを消遣の途なきに」を〈時間が足りなくて、財貨を浪費する方法がない〉という意味で説明したものが可

＊エは、「苦しみ」をウを不満に思う気持ちと解して説明したものが可

問2

〈ア貧窮者が イ生きるためにやむなく犯す罪に ウ厳しく、エ富裕者の オ奢侈による悪徳を カ見逃すのは、キ不条理だということ。〉

…17点

※ア2点、イ3点、ウ2点、エ2点、オ3点、カ2点、キ3点

＊アは、「明のみをみて」の見る対象が〈貧窮者〉であることを示せば可

＊イは、アのどういうところを見ているのかを示せば可

＊ウは、世間のイに対する視線が厳しいことを説明すれば可

＊エは、「暗をみる能はざる」の見る対象が〈富裕者〉であることを示せば可

＊オは、エのどういうところを見ていないのかを示せば可

＊カは、世間がオを見逃していることを説明すれば可

＊キは、傍線部に込められた筆者の慨嘆の気持ちに言及したものが可

問3

〈ア世の人々は イもはや ウ才能ある男と美しい女の恋愛を描く エ細末な小説に オうんざりしている。〉…9点

※ア1点、イ1点、ウ4点、エ2点、オ1点

＊アは、「世は」を〈世の中の人々は〉の意味に訳出したものが可

＊イは、「既に」を〈もはや〉の意味に訳出したものが可

＊ウは、「才子」を〈才能のある男〉、「佳人」を〈美しい女〉、「相思の〈小説〉」を〈恋愛を描いた〈小説〉〉の意味に訳出したものが可

＊エは、「繊巧なる小説」を、文脈から〈ちまちまとした小説〉といった意味に訳出したものが可

＊オは、「飽けり」を〈飽き飽きしている〉の意味に訳出したものが可

問4

〈ア世の中に対して イ自分の思いを訴える ウ手段も力もない エ人々〉…6点

※ア1点、イ2点、ウ2点、エ1点

＊アは、「民」の思いを訴える先を〈世の中に〉〈世間に〉などと補ったものが可
＊イは、「民」には自分の思い・窮状を訴える（ことができない）ことを説明したものが可
＊ウは、「民」がイをする術を持たないことを説明すれば可
＊エは、「民」を〈民衆〉〈人々〉などと説明していれば可

問5

〈ア社会的弱者救済の主張に　イ説得力を持たせるには　ウ正義を重視し　エ弱者に共感する必要があると　オ筆者は考えるから。〉
…20点
※ア6点、イ4点、ウ4点、エ4点、オ2点
＊「不告の民」に代わって彼らの窮状を世間に訴えるためには作家文人はどうあるべきかという筆者の考えを説明する。
＊アは、文筆を通じて世間に訴えるべきことを説明したものが可
＊イは、アを為すには、文章が人の心を動かす力を持つ必要があることに言及すれば可
＊ウは、イのためには、作家が社会正義を訴える熱い思いを持つ必要があることを説明すれば可
＊エは、イのためには、作家が困窮者に対する深い共感を持つ必要があることを説明すれば可
＊オは、この主張が筆者の考えであることを示せば可

【二】 出典…井上忠司『「世間体」の構造』／オリジナル問題

文章略解

解答に同じ。

解答

かつてウチととらえられた大家族や地縁集団などの中間集団が近代において弱体化し、個人は中間集団を媒介に自分と社会を把握できなくなった。ウチとソトの規準は状況的になり、家を同心円的に最も拡大したものが国家であるという家族国家観イデオロギーが定着した。戦後、このイデオロギーが崩壊し、世間観が共有されなくなった今も、ソトなる世間の価値でウチなる自分を評価する日本人特有の行動様式は、本質的に同様である。〔198字・解答例〕

解説

井上忠司（一九三九年生まれ）は、社会心理学・文化心理学・生活文化論を専門とする心理学者。京都大学大学院教育学研究科博士課程修了。奈良女子大学教授、甲南女子大学教授、国立民族学博物館客員教授を歴任。

『「世間体」の構造』は、唯一絶対神をもたない日本人が価値規準としてきた「世間」について、その原義と変遷を論じた著作である。

問題文は、第一段落に示されるように、〈「世間」観〉〈ウチとソトの観念〉の変遷について論じたものである。第二段落では、「かつては、伝統的な地縁集団（共同体）までをも、人びとはウチとしてとらえ……そこには、内輪のきびしい制裁力がみられた」が、「江戸の後期以降、とりわけ明治以降はおしなべて、ウチの批判力がすっかりおとろえ、かわって、ソトからの批評をおそれるようになった」と、その概要が示されているので、これを土台にしつつ、以降の記述のポイントを押さえてまとめてほしい。

第三段落から第六段落までは、第二段落で示された江戸の後期以降の「ウチの批判力」のおとろえについて、詳しく述べられている。まず、「社会の近代化にともなって、伝統的な『中間集団』の機能がいちじるしく衰退」した。それまで個人は、大家族や村落共同体などの「『中間集団』を媒介にして、ひろい社会のイメージをえがくことができた」とある。つまり、中間集団が十分に機能していた時代には、中間集団を規準として、それを挟んで相対する自分と社会の姿を把握していたというのである。しかし、「『中間集団』が解

体し、それにかわる新しいタイプの『中間集団』がうみ出されないとき、個人は自分と社会とをむすびつける糸を見失って、自分も社会もともにわからなくなるという状態におちいってしまう」。その見失った「糸」のかわりに、個人は「身近な集団（たとえば、家族）か、または巨大な集団（たとえば、国家）」に、ウチとソトを分ける規準の役割を求める。このことを筆者は第五段落で、「人びとはウチの規準を、あるときは、血縁集団にかぎるところまで縮小し、またあるときは、国家のレベルにまで拡大する」、また「ウチとソトの規準が、きわめて状況的にならざるをえなくなった」という言葉で表現している。〈中間集団の弱体化〉→〈個人は自分も社会も、ともにうまく把握できなくなる〉→〈ウチとソトの規準が状況的になる〉という流れを押さえて、ここまでをまとめたい。

そして「こんな混乱を上から秩序づける役目をはたしたのは、いうまでもなく、〈家族国家観イデオロギー〉であった」。つまり、ウチとソトの規準とされる「準拠集団」の規模は状況によって変動するが、それらの「準拠集団」はいずれも同心円的なもの、つまり「家（イエ）」と同じ構造を有し、それを拡大したものとしてとらえられるようになった。さらに「国家」はそれらの「イエ」と相似形をなす準拠集団の最上位のものとして位置づけられるようになったのである。「『準拠集団』のヒエラルキー構造が……定着していった」とは、このような、国家を頂点とした準拠集団の秩序づけが成立したことを指す。

第七～八段落では、「とりわけ明治以降は……ソトからの批評をおそれるようになった」と第二段落で述べられた点について、詳しく述べられている。「個人がイエの目標と対立し、その体制からはみ出したとき、それはただちにイエへの〈反逆〉を意味し」、「反逆者にたいする〈世間の目〉は、たいそうつめたかった」。そして「家族のメンバーさえ、反逆者をかばうどころか「世間」のがわに同調して、かれをイエから追放した」。つまり、人びとは世間の価値に照らして自分やイエのメンバーの行動を評価していたのである。そしてその構造の本質は、戦後も「いっこうに変わってはいない」と筆者は言う。

第九～十一段落は、戦後の家族国家観イデオロギー、つまり準拠集団のヒエラルキー構造の崩壊について述べた部分である。筆者によれば、一方で「旧来の『世間』観に固執しようとしている人たちもあれば」、他方で「古い観念であるとして、敬遠しようとする人たちもある」、さらには「『世間体』という漢字が正しく読めない若い世代がふえ」、「世間」観は多様化し、共有されなくなった。

しかし、「一見、現象形態においてまちまちであるかにみえる『世間』観も、準拠集団としての『世間』という本質からみれば、やはり一定の構造を共有している」。第十二段落で筆者は再び、「ソトなる『世間』の価値にコミットすることによって、ウチなる自分を見つめるという本質的な点では、各世代をこえて、人びとの行動様式はまったく同様である」と第八段落の主張を繰り返して、考察を締めくくっている。

「世間観の変遷」をたどるとして書き起こされながらも、たびたび繰り返されることからわかるように、〈世間観が多様化しても、日本人の行動様式が本質的にはまったく変わっていない〉という点に、本文の力点がある。そのことをしっかり踏まえてまとめてほしい。

【配点の目安】 35点

A〈かつてウチととらえられた ア大家族や地縁集団などの中間集団が近代において イ弱体化し〉…6点

※ア2点、イ4点

＊アは、〈大家族〉または〈地縁集団〉など、いずれかを例示して可

＊イは、中間集団の弱体化を押さえて可

B〈個人は中間集団を媒介に自分と社会を把握できなくなった〉…4点

＊〈自分も社会もともにわからなくなる〉などでも可

C〈ウチとソトの規準は状況的になった〉…4点

＊Aが自分と社会の把握にもたらした影響を説明して可

＊〈ウチとソトの規準が場合によって変動する〉ことを押さえたものが可

D〈ア家を同心円的に最も拡大したものが国家であるという イ家族国家観イデオロギーが定着した〉…6点

※ア3点、イ3点

＊アは、〈同心円的に重層化した「準拠集団」のヒエラルキー構造〉など、「ウチ」の同心円的な拡大について述べていれば可

E〈ア戦後、このイデオロギーが崩壊し、イ今は世間観が共有されなくなった〉…7点

※ア3点、イ4点

＊イは、〈準拠すべき「世間」のレベルの多様化とアノミー化〉〈「世間」観がバラエティーに富んでいる〉などでも可

F 〈アソトなる世間の価値でウチなる自分を評価する〉イ〈日本人特有の行動様式は、本質的に同様である〉…8点

※ア4点、イ4点

＊アは、〈世間にとらわれる〉〈人目を気にする〉などでも可

LF
直前一橋大国語総合演習
【2 回目】

Z-KAI

会員番号	

氏　名	

不許複製